慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウォルド・H・ハインリックス著(麻田貞雄訳)『日米外交とグルー』(近代日本外交史叢書第十巻)
Sub Title	W. H. Heinrichs, Jr., American ambassador ; Joseph C. Grew and the development of the United States diplomatic tradition
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.11 (1969. 11) ,p.140- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19691115-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と力に不可避的にともなう責任を背負い込んだアメリカ国民が、当面する内外の諸困難から抜け出ようとする際の最良の救いとなるであろう。

歴史学の分野において、比較論的視座を確立しようとする努力は、単にアメリカ史にかぎらず、従来の史観の動脈硬化を防止し、歴史に対する見方を一層豊富にし、未来への建設的展望を開くことを助ける。このような意味から本書でなされた試みは、Seymour M. Lipset, The First New Nation——The United States in Historical and Comparative Perspective (1963) などと共に高く評価されねばならない。そして、本書のようなアメリカ史に対する比較論的再検討が、今後ますます緻密なものとされていくことを望まずにはおられない。

付記　本書に収録された論文のなかには Voice of America Forum Lecture として日米フォーラムに掲載されたものもあるので参照されたい。

（太田俊太郎）

ウォルド・H・ハインリックス著

（麻田貞雄訳）

『日米外交とグルー』（近代日本外交史叢書第十巻）

一

ジョセフ・グルーといえば、戦後のエドウィン・ライシャワーと並んで「知日派」の駐日アメリカ大使として、ベストセラーとなつた著書『滞日十年』、さらにその印税によつて設立され多くの日本人留学生をアメリカに送つた「グルー基金」とともに、その名はわが国においても著名である。しかしその活動振りは知られながらも「日本をよく理解していた人物」というイメージが先に立つて、全体像を把握するという試みはなされていなかつた。日本においても外交官の本格的な伝記研究は比較的少ないが、その理由として、外交官自身が公文書のみならず、自己の身辺に発生した出来事をメモあるいは日記として記録に残すことが少なかつたことが挙げられよう。小村寿太郎程の人物にしても「父はものを書き残さない人でした。きつと後世の歴史家泣かせの人物だと思います」との小村捷二氏の談話に示されるように、個人記録の乏しさは信夫淳平氏の筆になる大部な「小村外交史」にしても、小村の人物像を浮き彫りにす

ることには成功していない。日記に外交の内幕を克明に書きとめ、公式文書を補おうと決心したグルーは、それを有用な備忘録として、また構想を練つたり問題を熟考したりするのに役立て、将来外交回顧録を公にすることを念頭においたとあつて、日本時代だけでも六〇〇〇ページ以上にのぼる豊富な文書を残している。この豊富な文書は、国務省勤務の経験もあるイリノイ大学教授ハインリックス博士の手によつて縦横に駆使され、その成果は American Ambassador; Joseph C. Grew and the Development of the United States Diplomatic Tradition (Little, Brown and Co.; Boston, Mass., 1967) として発刊され、今日グルー基金でアメリカに学び、英語に精通する同志社大学の麻田貞雄助教授の手によつて翻訳され、日本の広範な読者に紹介されることになつたのは、喜ばしい限りである。

ハインリックス氏は、本書の執筆について「伝記の体裁をとりつつ、とくに外交面としての側面に光をあて、……また彼の手法と目的とを理解するためにグルー外交をとりまく環境を研究する点で、同時に外交史をも意図し」たと述べているが（日本語版への序文）、それが成功したかは内容を紹介しながら追つて行こう。

二

序章「グルー――その人物と日本着任までの経歴」は、原書では東京着任以前の経歴、アメリカの職業外交発展に関して全一一章にわたつて詳述してあるものを、日本の読者には興味が薄いことと近代日本外交史叢書の主旨と体裁に合わせて、一章に圧縮してグルーの背景、性格、経歴、外交手法について概略を素描したものである。ボストンの上流社会の名家に生まれ、名門グロトン校、ハーバード大に学び、スポーツに狩猟に熱中した若き日のグルーの姿が描かれる。また外交官としての全経歴を通じて大きなハンディキャップとなつた難聴が、少年時代の猩紅熱によるもので、以来、相手がはつきり話してくれないと普通の会話はたいてい聞きのがしてしまつた（二―三ページ）といつた知られざる一面が紹介され、従来のグルー像はこの辺から修正されて行く。また夫人の曾祖父オリヴァー・ハザード・ペリーの弟が日本の扉を開いたかのペリー提督であり、父トーマス・サージェント・ペリーは慶應義塾で教鞭をとつたことがあり、アリス夫人が少女時代日本で三年間過したことを知るに及んで、グルーは極めて身近かな人との感をも懐かされる。

グルーが外交界に入つたのは「世界的放浪癖」とボストン中心の生活に倦き足りず活躍の舞台を外交に求めたことにあつたが、当時本職外交家という職業（プロフェッション）はまだ確立して居らず、大公使は政治的功労者に与えられるもので、在外公館の書記官には道が開かれるという保障はなかつた。したがつて彼はそれを確立するために貢献し、制度の改革によつてある程度見通しがついてから、外交に一生をささげる決心をしたのである。序章では第一次大戦前のベルリン、ウィーンにおける優雅な宮廷外交を満喫して過せた「静穏な外交の古き日日」が、第一次大戦によつて破られる有様、大戦に当つて戦争を回避するうえで外交の効力に深い信念を寄せていたためド

イッの意図を本国に正確に伝えることが出来ず、このにがい経験から、一九四一年の日米危機の際「外交官達が平和への道を探究しているあいだも、けつして戦争の危険を過少評価するまい、と一段と決意をかため」たのではないかと著者は指摘する（五ページ）。やがて国務次官に就任したグルーは、柔軟性と想像力に欠け、権益擁護と現状に固執する傾向を持つに至る。それは一九二六年の大沽事件の際の「砲艦政策」採用の進言の受け入れに見られるが、ワシントンにあつて適確な判断を行い得ない彼の限界が示される。旧来の外交官制度温存の放棄のため自らトルコ大使に転出した彼は、アンカラで魅力ある五年間を過し、駐日大使就任の交渉を受けるのである。グルーは「心底では外交を頭（マインド）よりも心（ハート）の問題であるとみていた。彼の考え方によれば、国家間の関係は人間関係と本質的に変わりがなく、同じく人間の行動の主観的、直観的な源泉に支配されるものであつた」（一六ページ）。したがつて彼は、海外の政治情勢の展開を系統的、包括的に分析することを重視せず、また本国もこれまではそういつた要求をしたことは――ベルリン代理大使とローザンヌ会議の期間を除いては――過去三〇年の外交官生活の間なかつたのである。

三

このような過去の経歴を以つて日本に赴任したグルーにとつてまず問題となつたのは、コミュニケーションであつた。共通の文化遺産あるいはフランス語といつたヨーロッパ外交の共通の言語を持たないことは、彼自身が日本語を全く解さないこと、難聴と相まつてかなりの困難を感じさせた。しかし、われわれ日本人が考える程グルーは日本の政治の複雑怪奇さには驚かなかつたようである。アメリカの古い外交官制の中にも、日本の派閥にみられるような親密さや共通の絆がかなり残つていたからである。しかしグルーはかつて他の任国でやつて来たように首脳層だけを相手としたのではそのダイナミックスは十分に把握出来ず、彼は八人の有能な部下の他、在日米人記者との雑談、陸・海軍武官、商務官の政策審議への参加要請、詳細な報告を送るようにとの中国の米出先機関への要請、大使館員へ特殊研究課題を与える、といつたことで日本情勢把握と解釈を行おうとし、判断の材料は質、量共に増大し大使館には活気がみなぎる。グルーが個人的に接触したのは、樺山愛輔、牧野伸顕、幣原喜重郎、荒木貞夫陸相、金子堅太郎といつた人々であつたが、彼らとの個人的接触、あるいは客観情勢の分析から、グルーは日本には強硬ラインと国際協調ラインの定期的周波があると判断する。そして特に国際協調ラインが主流を占めることを、広田外相の就任、堅実な指導層が陸軍内にあらわれたといつた徴候を捉えては期待する。著者も指摘するように、グルーにとつての危険は、彼の楽観的な性格と、これまでの比較的静穏な任地での経験とがわざわいして、対外侵略と国内暴動の一時休止のなかに、すぐ〝常態への復帰〟の兆候をみてしまう、ということであつた。また彼は日本情勢に精通するにつれてスティムスンの「道徳的圧力」を前面に押し立てた対日政策を批判し、友好的な対日ゼスチュアと建設的な提案を勧告

している。「理論を事実に適合させようとするうえで、われわれは事実を優先させなければならない」とするグルーは、スティムスンの道徳的追放の方式を疑問視し、武器禁輸は、日本の場合、侵略国を助けるだけであり、経済的ボイコットは、必要な物資を入手するため、日本に他の地域を侵略させるだけであるとしたが、さりとて当面のところ、実際的な提案は持ちあわせていなかつたのである。天羽声明によつて彼の対日観は大きく変化するが、著者は、グルーの欠陥はむしろその「想定のわく組みにあり、彼の解釈にうまくあてはまる事実だけを重視し、他の事実を無視するような把握のしかたにあつた」（七一ページ）という。一九三〇年代においても二〇年代の平和主義と秩序への回帰がいまだ選択可能の道であると想定した点、また大勢を逆転させるだけの実力が穏健派にあると考えた点、そして現状維持にたいする挑戦は主として陸軍の青年将校に限られているとみた点などは、いずれもグルーの誤断であつたことがはつきり指摘される。

天羽声明を転機として、グルーの日本の拡張主義にたいする理解とその対処の仕方は大きく変化する。威信すなわち力を背景とする対日外交の展開を示唆するに至つたのである。しかし、二・二六事件の評価にしても、その根本原因は富の悪分配にあつたとし、「ニュー・ディールの日本版」を行うことによつて一般大衆、特に農民の福利に強力な施策を講ずれば将来の反乱は防止されると考え、反乱が鎮圧され、関係者が処分されると、危険分子は〝穏健分子〟の統制下におかれ、広田首相、有田外相のラインによつて主戦論の声は弱まり、日米関係は平穏になると予想した。グルーは、陸軍の国内面における真の関心が、大幅な軍事予算のひきあげのほかに、以前から陸軍の優秀な頭脳をひきつけていた「国防国家」の実現にあることを見落していた（一一四ページ）のである。

日華事変が勃発して、グルーは情報の蒐集に前にも増して力を入れるが、「自分は人間の力では制御しきれない悲劇的な出来事の傍観者でしかない」という感覚がこの危機外交の間彼の頭を貫く。日中間の交渉で喰い止められるかも知れないと考えた戦争が、再発、拡大するにつれて、外交は歴史の激流の中で翻弄されているかのようにみえはじめたのである。またグルーの目指したアメリカは非介入の立場をとり、在華米人の保護を主とすべきであるとの立場は、ワシントンのスティムスン方式への回帰によつて失望させられる。現下の情況で日本に制裁を加えることに賛成出来ないのは、ひとつには誤解を生むおそれがあまりにも大きいからだ、とグルーは考える。グルーが慨嘆したのは、心理的要素を無視して〝数字と統計〟だけにもとづいて判断する〝制裁主義者〟たちの性癖であつた。克己力や自己犠牲、それに勝利を得るための献身という点にかけては日本人はドイツ人に劣らず、対日圧迫策が戦争の危険をもたらすことを特に懸念したのであつた（一七三ページ）。日米戦争の開始に至るまで、彼の努力は報復と再報復とのエスカレーションをいかに喰いとめるかにあつたのである。

日米両国が戦争という破局に至つて、帰国したグルーは、アメリカ国内で積極的に日本について発言するが、敵国日本のイメージは

厳しいものではあつたが硬直した画像ではなかつた。特に一九四三年五月以来、彼は日本の国民と軍部をはつきりと区別し、アメリカ国民に日本人を人間として認識させるよう努力を集中しはじめたのである。そのため彼は「日本の土着の発展と変革を助長する」というテーマを展開している。その一つとしての彼の天皇制存続の主張は、一時米国内に論議を惹起したが、アメリカの戦後対日処理の重要な要素となつたことは疑いない。

第二章から第九章までは、こうした彼の日本に関する努力――報われないことの方が多かつたのであるが――を、彼を取り囲む環境と関連させて取上げ、極めて興味ある内容を提供している。

四

以上によつて簡単に紹介したことからも容易に判断されるように、本書はグルーという一人の優れた外交官の活動を中心に描かれた伝記の傑作であり、一〇年以上にわたる日米外交史でもある。

ただ本書にも欠点がないわけではない。グルーを中心に記述が行われ、アメリカの世界政策あるいは国際政治全体の動向が稀薄な点、また日本側の動きを英文の資料、研究に頼つたため、グルーの判断と日本側の実際の動向との対比がなされなかつた点がそれである。

スティムスン、ハル両国務長官の硬直した「法律学的、道徳家的アプローチ」に対してグルーの「現実主義」は、戦後ジョージ・ケナンなどによつて評価され、さらに最近ポール・シュローダーが

"The Axis Alliance and American-Japanese Relations—1931～1941"においてケナン説を発展させ、より高い評価が与えられている。ハインリックス教授は、グルーが反枢軸のイデオロギー的、倫理的命題をいかにして自分の現実主義に調和させるかというジレンマに悩んだ点を捉え、グルーの立場を解明している。訳者麻田氏は、シュローダーなどの改訂史論を前進させたハインリックス教授の結論を、穏健な「新改訂史観」として位置付けている。日本においてもこの点に注目している研究者の中には、一橋大学の細谷教授等が居られるが、今夏ハインリックス、細谷、麻田三氏をはじめアメリカ外交史、日本政治史、日本外交史専攻者多数の参加を得て「日米関係史（一九三一年―四一年）研究会議」が持たれ、日米両国が「危機の一〇年」において、国務省、陸海軍、民間といつた異つたレベルで相手国をいかに見ていたかについて研究報告、意見交換が行われたが、これを機に日米関係史の研究も一段と飛躍するであろう。

本書は、豊かな内容に加えるに流麗な訳文と相まつて、日本の読者には大きな喜びを、研究者には大きな刺激を与えるものと云えよう。

（昭和四四年二月　原書房刊　四〇〇ページ）

（池　井　優）